

コロナショックによるサードプレイス論の変化

中庭ゼミ 3年

安部光希・磯部直樹・大野将来・西田翔一・森稜真

1.目的

新型コロナウイルスの流行によってテレワークが普及したが、同時に家庭に仕事が持ち込まれることによる問題点も露わになった。家庭（ファーストプレイス）と職場（セカンドプレイス）の境界が曖昧になり、このような生活の変化に対応する「居場所」とはどのようなものなのかを明らかにするため、「サードプレイス」に焦点を当てて研究をした。

2.コミュニティ重視のサードプレイス

サードプレイスはこれまで、オルデンバーグが提唱した「家庭でも職場でもない第3の居場所」という見方であり、娯楽・嗜好品の摂取や消費をして楽しむ場であると考えられる。しかし、コミュニティに重点を置いて考えると、イタリアにある「Centro」と呼ばれる街の広場の存在が浮かび上がってきた。そこでは地域の人々との会話、リフレッシュなど、それぞれが思い思いに過ごしている。コミュニティを新たに作り、それを受け入れる空気感が存在している。これからこのような機能を持ったサードプレイスの重要性が、日本でもより高まってくるのではないだろうか。

3.サードプレイス Ver.1 と Ver.2

我々は、サードプレイスは「Ver.1」と「Ver.2」の二つに区分できると考えた。

サードプレイス Ver.1 は、同質で強い紐帯のコミュニティであり、居酒屋に多くみられる。仲間内の閉鎖性に支えられ、1個人・集団をまたいだコミュニケーションはあまりされない（排他性）。その中で娯楽や嗜好品を通じて一時的な回復をする場であるとする。一方、サードプレイス Ver.2 は、多様で緩い紐帯のコミュニティである。目的の多様性があり、それぞれが思い思いに過ごしその振る舞いを許容しあう。コミュニティの中で活動したり話したりすることによって（つながりの流動性）、長期的な安心感を得て回復をする場である。

また、ここでは家庭または職場のタスクの外部化も可能である。例えばテレワークによって、子供の面倒を見切れない、雑談が少なく新たな発想を得られないなどの課題が挙げられたが、サードプレイス Ver.2 では、それらの活動が可能であり、子育てやコミュニケーションを外部化することで、すべてを家庭や職場に押し付けることがなくなり、自分の「居場所」にゆとりが出きると考える。

<事例>ランドロマットカフェ、kikki+、南町田グランベリーパークなど

4.結論

現在進行形で変化しつつある状況であるため、結論は確かではないが、これからはコミュニティに重点を置き、家庭または職場で支えきれなくなったタスクを外部化することが出来る「Ver.2」のサードプレイスにシフトしていくことが必要になるのではないかと考える。またこのようなサードプレイスは、有事の際のバックアッププレイスとしても機能していくように思われる。Ver.1 から Ver.2 へ。コロナショックによって、求められるサードプレイスの機能に変化しており、それに対応するコンセプトとして、我々は「サードプレイス Ver.2」を提案する。

参考

『サードプレイス』(Ray Oldenburg 2013)

『サードプレイスから都市再生を考える』(久繁哲之介)

『交流拠点の新たな形「使い手の能動性を引き上げる地域の交差点 喫茶ランドリー」』(田中元子 2019)